平成二十七年度

目白研心中学校・入学試験問題

国語

［第一回］

〈注意〉
一、時間は五十分です。
二、答えはすべて解答用紙に記入しなさい。
三、文字は鉛筆で、ていねいに、はっきり書きなさい。
四、問題用紙は、一ページから十ページまでありますので、はじめに確かめなさい。

受験番号
中　学 番
氏　名

一　次の①～⑤の――線の漢字には読みをひらがなで記し、⑥～⑩の――線のカタカナは漢字に直しなさい。

① 大臣に就任する。
② 深さを測る。
③ 車窓からながめる風景。
④ 力を備える。
⑤ 魚を川に放つ。
⑥ ラジオタイソウに参加する。
⑦ 不足分をオギナう。
⑧ 楽器をエンソウする。
⑨ 会社にシュッキンする。
⑩ センモン的に研究する。

二　次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

1　ラフレシアの花には、においがあることで有名である。「うちの博物館にはラフレシアの標本があります」というと、たいていの人は、「とても臭いそうですね」とおっしゃる。①多くの人は、強烈な腐臭があると信じこんでいるらしい。しかし、実際にはそれほど強いにおいではない、と記述された書物も出ている。私が※1ボルネオ島で最初にラフレシアに出会ったときにも、それほどにおいを感じなかった。花の中央部に鼻を近づけて、はじめてちょっと嫌なにおいがした。

2　ではなぜ、強烈な腐臭があると信じられているのだろうか。※2ラッフルズたちが最初にラフレシアを発見したときの記録では、花を処理している間じゅう、激しい腐敗臭に悩まされたという。後世の人々は、ラフレシアの実物を見る機会などなかったのだから、この話がそのまま引用されることも多かったにちがいない。権威者の言葉は、しばしば実態とかけ離れて独り歩きすることがある。やがてラフレシアの実態が解明されれば、においの記述も正確になるだろう。②強烈なにおいを発するラフレシアのほうがおもしろいのではあるが。

3　ラフレシアの花は、巨大で鮮やかな赤い色をしている。実際に、薄暗い※3熱帯雨林の中でその花が咲いていると、そこだけぽうっと明るいような気がして遠くからでもわかるのである。

4　その大きさ、色合い、質感といい、とても植物とは思えず、さらにはにおいというおまけまでついて存在感にあふれている。私ははじめてラフレシアの花を見たとき、その存在感に圧倒され、しばし立ちすくんでしまったのを覚えている。

5　③ラフレシアの花の形はかなり特殊なもので、やって来たハエは花の中で変わった行動をすることになる。ラフレシアは雌雄異株、つまり、雄しべを持つ雄花と雌しべを持つ雌花とに分かれている。しかし、花の外観は雄花も雌花も区別がなく、花の中央部はドーム状の部屋になっていて、中心に円盤状の構造がある。円盤の表面には多数の突起があり、外から花を眺めたとき、それらがまるで雌しべのように見えるが、雌しべでなくただの突起である。［　A　］雄しべや雌しべは、円盤の下面がえぐれ込んだ奥にある。そっと指先を入れて円盤の下面を触ると、堅い毛が生えているのが雄花、つるっとしているのが雌花である。

6　ハエはにおいにひかれて雄花の円盤の下に入り込み、狭い通路を歩いて雄しべのところまでたどり着くと、粘着性の花粉が自然とハエの背中に付着するようになっている。ハエは餌を探すがどこにもない。しかたなくあきらめて飛び去り、次に別のところで咲いてい

る雌花まで飛んでいって、やはり同じように円盤の下へもぐり込んでいく。[B]背中についた花粉が今度は自動的に雄しべに付着するようになっている。つまりハエは、自らの体に花粉をつけて、雄花から雌花へと花粉を運ぶ運搬屋として働くわけである。

7 ④植物と昆虫の関係には、ミツバチなどが花粉を食べ物として利用する代わりに、花から花へ花粉を運び植物の受粉に役立つ、すなわち、植物と昆虫のお互いが利益を得るという関係があるわけだが、ラフレシアとハエの場合はどうなのか。ハエにはとくに得るものはないように見える。ラフレシアが一方的に得をしているのだ。このような関係がほかにあるだろうか。[C]サトイモやカソアオイの仲間には、ラフレシアと同様においを出してハエなどを引き寄せ受粉してもらうが、ハエには特別の報酬を与えないという、いわば騙しの関係のあることがわかっている。植物もなかなかやるものだ。

8 騙されたハエによって受粉が終わると、やがて雌花では果実が実り、微小な種子が無数にできる。ラフレシアは、ブドウ科ミツバカズラ属のつる植物を宿主とする寄生植物なので、新しい花が咲くためには、種子がミツバカズラのつるに入り込まなければならない。つるの中でやがて種子が発芽すると、成長してつるの樹皮をこぶのように盛り上がらせる。さらに成長すると、樹皮のこぶが破れてラフレシアのつぼみが出現する。

9 つぼみは最初、黒い苞※4で覆われたままだが、やがて大きく成長すると苞の間からオレンジがかったピンク色の花びらが見えてくる。このころのつぼみは直径二〇センチメートル以上あり、⑤まさにピンクのキャベツである。ここまで来れば、あと一週間ほどで開花する。種子がつるにもたらされてから開花するまで、一年半あるいはもっと時間がかかるとされているが、開花するとたった三日で黒く変色し、やがてどろどろに溶けてしまう。

10 こうしてみると、ラフレシアの生態はよくわかっているように思われるかもしれないが、まだまだ謎が多い。たとえば、ハエによる受粉のからくりはわかったが、ひじょうに少ない開花個体をハエがうまく見つけて、受粉を成功させる機会は稀だと思われる。にもかかわらず、なぜ絶滅しないのだろうか。また、種子がミツバカズラのつるにまでどのように運ばれ、さらにつるの組織の中にどのように入り込むのか。つまり何者かが関わっているはずだが、わかっていない。

11 ラフレシアのもう一つ不思議なことは、花の大きさである。世界一大きな花を咲かせるとされ、最も大きなものでは直径一メートルを超える。この巨大な花が、ミツバカズラのつるの上にいきなり咲く。寄生植物であるラフレシアには葉がないのである。

12 植物はふつう自らの葉で光合成によって栄養をつくり出すのだが、葉のないラフレシアは、宿主であるミツバカズラのつるから、すべての栄養と水を得ている。普通に考えれば、寄生植物が生きるためには、自身の体を小さくして維持にかかるコストをできる限り小さくするほうが効率がよい。にもかかわらず、ラフレシアは巨大な花を咲かせる。なぜ⑥このような効率の悪い生き方をしているのか。普通であれば生き残ることさえ難しいと思うのだが、絶滅しないでちゃんと生きている。しかもただの一種だけが細々と生きているのでなく、ボルネオ島やスマトラ島※5を中心に一四種ほどが知られている。どのようにして多くの種が※6分化してきたのか、これも謎である。

13 熱帯雨林の中でラフレシアの花を眺めていると、寄生植物だとか、効率の悪い生き方だとか、種分化や繁殖生態の謎だとかそんなことはどうでもいい、おれは大きな花を咲かせたいんだと主張しているようにさえ感じる。これがラフレシアの大きな魅力でもある。最近、子ども向けアニメの人気キャラクターのなかにラフレシアが登場している。そこではラフレシアは妖怪である。人を魅了してやまない妖怪ラフレシア。誰が考えたのか、⑦いかにもふさわしい設定だと思う。

（高橋　晃『熱帯雨林の妖怪ラフレシア』）

※1　ボルネオ島、※5スマトラ島…いずれも東南アジアの島
※2　ラッフルズ……十九世紀前半のイギリスの植民地建設者
※3　熱帯雨林　……熱帯で雨が多い地域の森林
※4　苞　……芽やつぼみを包んで保護している、葉の変形したもの
※6　分化……一つのものが発達して、いくつかのものに分かれること

問一　――線①「多くの人は、強烈な腐臭があると信じこんでいるらしい。」とありますが、なぜこのように信じこまれているのですか。その理由として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア　ラフレシアは標本にすると、生きているときより腐敗臭が強くなる習性を持っているから。
イ　ラフレシアのにおいは地域によって違い、発見した時の花が強い腐敗臭のものだったから。
ウ　ラフレシアの発見者たちが腐敗臭に悩まされたという話が、その後も引用されてきたから。
エ　ラフレシア特有の強烈な腐敗臭は、ヨーロッパ人の発見者には耐えがたいものだったから。

問二　――線②「強烈なにおいを発するラフレシアのほうがおもしろいのではあるが。」とありますが、筆者はなぜこのように思うのですか。その説明として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア　ラフレシアの花をまったく知らない人々に、熱帯雨林に咲く世界最大の花の存在を、強く印象づけるのに役立つと思ったから。
イ　ラフレシアの花の色とにおいが、ボルネオ島に住む人たちの生活に適したものだということを世界に知らせたかったから。
ウ　本当の花のにおいは強烈ではないという事実よりも、巨大な花を処理することの大変さをより強調したかったから。
エ　強烈なにおいを発散させることが、鮮やかな赤い色で熱帯雨林に咲くラフレシアに圧倒的な存在感を与えると思ったから。

問三　――線③「ラフレシアの花の形はかなり特殊なもので、やって来たハエは花の中で変わった行動をすることになる。」とありますが、ハエは結局どのような役割を果たすのですか。それがわかる一文をこの後の段落からぬき出し、初めと終わりの五字で書きなさい。**（句読点も数える）**

問四　空らん[A]～[C]に入る語の組み合わせとして最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

	A		B		C
ア	しかし		やはり		そして
イ	そして		すると		じつは
ウ	けれど		つまり		または
エ	すると		そして		しかし

問五　――線④「植物と昆虫の関係」とありますが、aミツバチと花との関係、bラフレシアとハエの関係を、本文ではそれぞれどのように述べていますか。aは十四字で、bは五字でぬき出しなさい。

問六　――線⑤「まさにピンクのキャベツである。」とありますが、「まさに」の使い方がこれと同じものを次から選び、記号で答えなさい。

ア　カメラが、まさに鳥が飛び立つ瞬間をとらえた。
イ　長男のきみこそまさに家をつぐべきだ。
ウ　この絵は、まさにゴッホが描いた本物だ。
エ　今、目の前で、まさに自転車事故が起きた。

問七　形式段落[10]・[11]・[12]について述べている次の文から、最も適当なものを選び、記号で答えなさい。

ア　[10]・[11]段落はラフレシアの謎について具体例をあげ、[12]段落は[11]段落で述べている謎をより深く考察している。
イ　[10]・[11]・[12]段落は、ラフレシアについての疑問を、しだいに深く解明していく内容となっている。
ウ　[10]段落は、前の[9]段落の内容をまとめたもので、[11]段落は次の[12]段落で述べる問題をすべてあげている。
エ　[10]段落は、[1]～[9]段落のまとめの内容で、[11]・[12]段落は、後の[13]段落と共に全体の結論となっている。

問八　――線⑥「このような効率の悪い生き方」とありますが、「効率が良い生き方」とはどのような生き方ですか。「～生き方」につながる形で本文の言葉を使って、三十字以内で答えなさい。**（句読点も数える）**

問九　――線⑦「いかにもふさわしい」とありますが、何が何にふさわしいというのですか。本文の言葉を使って、三十五字以内で答えなさい。**（句読点も数える）**

問十　次のうち、本文の内容と合っているものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア　ラフレシアは単一種であり、この百年間、東南アジア以外では発見されていないことがわかっている。
イ　ラフレシアは雄しべを持つ雄花と雌しべを持つ雌花とに分かれていて、花の外観はその区別がない。
ウ　サトイモやカソアオイの仲間は、ラフレシアとは違い、受粉を手助けしてくれる虫に蜜を与える。
エ　ラフレシアは寄生植物で葉は生えず、そのかわりに花びらで光合成をするという特別な植物である。

三　次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

小学三年生の勇翔の夢は、プロのサッカー選手だが、本人は自分のレベルがわかっていない。そんな息子に苛立ちを感じながら、かつて同じ夢を抱いた父の拓也は勇翔をサッカーのクラブチームの入団テストを受けさせることにした。

笛が鳴り、各チーム三本ずつのゲームを終え、勇翔は10番のビブス※1を脱いだ。セレクションの一次は終了。子供たちは解散となった。

「行こう」

拓也はジーンズのポケットに両手を突っ込んで歩き出した。

聡子と恵里がついてきた。

――わかっていたことじゃないか。

拓也は苛立つ自分の胸に語りかけた。

――勇翔に少しでも光るものはなかったか？

考えてみる。

――ないな、

と思う。

現状ではない。悲しいけれど、①それが現実だった。

待ち合わせ場所にやってきた勇翔が合流し、家族四人で隣にある芝生広場のほうへ歩いて行った。ほかの親子の姿もあった。興奮気味にミニゲームの話を母親に語りかける子供もいた。

拓也はなにも言わず広場の一番奥まで進み、ようやく足を止めた。そこまで歩いてくる親子はいなかった。聡子がレジャーシートを敷いて、お昼の準備をはじめた。時計を見ると、もうすぐ十二時になろうとしている。

「どうだった？」

レジャーシートにあぐらをかいた拓也が声をかけた。

勇翔は立ったまま、「うん……」と言ったきり黙り込んだ。

「さあ、ご飯にしようよ」

用意した弁当を聡子がひろげはじめた。

「ちょっと待って」

拓也は右手で制止して、②もう一度問いかけた。「セレクション、どうだった？」

うつむいた勇翔は少し間を置いてから、「なかなかボールが来なかった」とこたえた。

「そうだったな。どうしてだか、わかるか？」

「みんな自分でゴールを決めたいから」

「たしかにな。自分をアピールするには、ゴールが一番手っとり早い。合格するために、みんな必死だ。おまえはどうだった？ 自分の力は出せたか？」

「――うん」

小さくうなずいて唇を結んだ。

「おまえとしてはどう思う？ 一次セレクション、合格したと思うか？」

勇翔は口をすぼめて考えこんでから、「うん、たぶん……」と言った。

「たぶん、なんだよ？」

「一次は受かってると思う」

③勇翔はからだをねじりながらこたえた。

「そうか、そうなのか……」

拓也は低い声を漏らした。今ここで言うべきか、それともセレクションの結果がわかってから家に帰って話すべきか、迷った。

「おまえ、本当にそう思ってるのか？」

気持ちを静めて訊いてみた。

勇翔の目がうつろに泳いだ。

「父さんな、おまえは駄目だと思うよ」

拓也はやはり今言うべきだと思い、口に出した。

「え？」

「おまえは一次セレクションには受からない。絶対にな」

強い調子で断言した。

「ねえ、パパ……」

④なだめるように聡子が口を挟んだ。

勇翔は唇をとがらせるようにした。

「だったら、見てこい」

「え？」

「十二時に、受付した場所に結果が張り出される。おまえの番号１３２があるかどうか、見てきなさい」

静かな口調で告げた。

「――わかった」

「じゃあ、ママもついていくよ」

聡子が言うと、「私も」と恵里が立ち上がろうとした。

「ゆうと――」

拓也は声を高くした。「ひとりで行けるよな」

「はい」

勇翔はくるりと背中を向け、芝生の広場を歩き出した。その小さな背中を三人で見送った。

「お弁当、どうする？」

「待ってあげよう」

拓也が言うと、恵里がうなずき、弁当箱の蓋をすべて閉じた。

「勇翔なりに、がんばってたんだけどなあ」

聡子が悔しそうにつぶやいた。

十分ほどたって、勇翔が広場にもどってきた。

しょんぼりとしたその姿を見れば、結果は一目瞭然だった。うつむいたまま、まっすぐに芝生の上を歩いてくる。内側から舌で押すようにして、ほっぺたをふくらませていた。

三人は座ったまま勇翔を待った。レジャーシートの前で立ち止まった勇翔は、右腕を上げ、目の高さで横に拭った。

「なかった」

勇翔は何度も目をしょぼつかせた。

「そうか」

拓也はうなずき、「じゃあ、お昼にしよう」と言った。

聡子と恵里が弁当箱の蓋を開いた。早起きしてつくったお弁当は、運動会のときと同じように彩りよく、にぎやかだった。鶏の唐揚げ、卵焼き、プチトマト、茹でブロッコリー、ウインナーのタコ、勇翔の好きな車エビのベーコン巻きもちゃんとあった。

「さあ、ママがせっかくつくってくれたお弁当だ。みんなで食べよう」

「うん、食べよ」

恵里がやさしい声で相槌を打った。

「そうだね、ママもお腹減っちゃったよ」

聡子が水筒のふたにお茶を注ぎ、恵里がおにぎりを勇翔に手渡した。

勇翔はおにぎりを手にしたまま突っ立っていた。

「どうした、座れよ」

拓也が声をかけた途端、勇翔はしゃくり上げ、「ぼく、ぼく……」と繰り返した。

「どうした？」

「うっ、うっ……」

※2嗚咽で言葉がつながらず、肩が震えた。過呼吸にでもなりはしないかと、心配になるほどに。

⑤「ぼく、ほんとは、わかってた。……だけど、言えませんでした」

胸を波打たせながら勇翔は言葉をしぼり出した。「最初から、あきらめちゃいけない、そう思って、嘘をつきました」

洟が糸を引いて垂れ、涙が赤い頬を伝った。

「そうか。駄目だって、自分でもわかってたんだな」

「――はい」

勇翔はシューズを脱ぎ、レジャーシートに正座した。

⑥鶏の唐揚げを包んだ銀紙が冬の太陽を反射させ、きらきらと光った。少し離れた場所でボールを蹴りはじめた親子の笑い声が、風に運ばれてきた。勇翔のかさついた膝に涙が落ちてはじけた。

「いいか、勇翔」

拓也は言葉を選びながら続けた。「父さんはここへ来る前から、ほんとはわかってたよ。おまえの力では通用しないことは。今日ここに集まったのは、おまえと同じようにプロのサッカー選手になる夢を持ってる三年生だ。みんな上手だったな。それに、すごく真剣だった。父さんは勇翔に感じてもらいたかったんだ。おまえと同じ夢を持った子たちが、今どの辺を歩いているのか。自分が、どのあたりを歩いているのか」

「はい」

「勇翔、認めろよ。おまえは、へたくそだよ」

拓也が言うと、勇翔は顔を空に向け、声を上げて泣き出した。

「おまえは、今日ここへ集まった三年生のなかで、たぶん一番へただ。参加すること自体、無茶だったかもな。でもな、勇翔。それは今日であり、今の時点だ。これからがんばれば、追いつけるかもしれない。だから⑦ここへ来たのは、父さんは無駄だとは思っていない。それがわかっただけでも来た※3甲斐はあった。ただ、続けるかどうかは、おまえ次第だ」

拓也は勇翔の目を見た。「サッカー選手になる夢をあきらめるなら、それでいい。無理だと思ったら、またべつな夢を見つけろ」

「やだっ」

勇翔は激しく首を横に振り、叫んだ。「やりたい！」

聡子も恵里も黙っていた。お弁当にはだれも手を付けなかった。

「でも、それって大変だぞ。今日ここへ来てわかっただろ。上には上がいるんだ」

「うん。でも、あきらめない」

「どうして？」

「サッカーが、……好き、……だから」

勇翔はしゃくり上げ、言葉が切れ切れになった。

もうこれ以上責めたくはなかった。でも、たしかめておきたかった。

「じゃあ、これだけは聞かせてくれ。おまえは本気でサッカーをやるのか？　それとも遊びでサッカーをやるのか？　本気でやるなら、父さんは協力する。遊びでやるなら、もうなにも言わない」

「本気で、……やります」

勇翔はまっすぐに拓也を見た。

「本当か？」

強くうなずく。

「本当に本当に、そうなんだな？」

「ハイ」

「よし」

拓也は息を吐くと言った。「今日この場所へ来たことを忘れるな。※4ピッチに立ちながら、なにもできなかった自分を忘れるな。この場所で味わった悔しさを絶対に忘れるな。――いいか、おまえのサッカーは、ここからはじまるんだ」

拓也は手にしたおにぎりをほおばった。梅干しがやけにしょっぱかった。

勇翔はうなずき、同じように大きな口を開けておにぎりをほおばった。

その姿を見た拓也は、⑧鼻の奥に痛みを感じながら、遠くに目をやった。

冬枯れした芝生のところどころに、緑の新芽が顔を出しはじめていた。陽気に誘われたのか、小さな薄紫色の蝶が一匹、ちらちらと頼りなげに低く飛んでいく。ボールを蹴る親子の姿が、不意にぼやけた。

「勇翔ががんばるなら、ママも応援する。サッカーのことは、よくわからないけど」

聡子の言葉に、勇翔はコクリと首を振った。

恵里は黙って、爪楊枝に刺さった車エビのベーコン巻きを弟に差し出した。

「いいか、勇翔。おまえのサッカーは、ここからはじまるんだ」

拓也はもう一度くりかえした。

（はらだ　みずき『ここからはじまる』）

※1　ビブス……競技者が付けるゼッケン
※2　嗚咽……声をつまらせて泣くこと
※3　甲斐……行動の結果としてあらわれる効果
※4　ピッチ……グラウンド

問一　――線①「それ」とはどのようなことを指していますか。「～ということ」につながる形で本文の言葉を使って十五字以内で答えなさい。

問二　――線②「もう一度問いかけた。『セレクション、どうだった？』」とありますが、なぜ拓也は勇翔に二度も「どうだった？」と聞いたのですか。その理由として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア　セレクションの一次も終わり、昼食を食べる前に今すぐに勇翔が自分自身の成長を実感しているかを知りたかったから。

イ　セレクションに付き合ってくれた家族全員を前にして、自分自身の頑張りをしっかりと言葉にして表現してほしかったから。

ウ　セレクションの結果を心配に思い、勇翔本人は合格の手ごたえを感じているかどうかを確認しないと食事ができないから。

エ　セレクションの一次が終わり、勇翔が自分自身のレベルが足りていないことを実感しているかどうかを知りたかったから。

問三　――線③「勇翔はからだをねじりながらこたえた。」とありますが、この時の勇翔の気持ちとして最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア　本当は合格しているかどうかわからないが、父親には意地を張っている気持ち。

イ　自分は合格すると思い、セレクションを受けた仲間たちに対する後ろめたい気持ち。

ウ　一次は受かっている自信はあるが、それを家族の前で言うことが恥ずかしい気持ち。

エ　合格したかどうかなどは、わかるわけがないと父親に対していらついている気持ち。

問四　――線④「なだめるように聡子が口を挟んだ。」とありますが、なぜ聡子はこのようなことをしたのですか。その理由として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア　拓也の言葉で自信をなくしている勇翔の様子を見て、拓也に言い過ぎたことを反省させたかったから。

イ　拓也が勇翔に対して強い口調で話をしているので、勇翔の気持ちを尊重してあげたいと思ったから。

ウ　拓也が勇翔に対して自信をなくすようなことを言っていたので、勇翔に元気を出してほしかったから。

エ　拓也の勇翔に対するきつい言葉を聞いて、動揺した恵里の気持ちを落ち着かせたかったから。

問五　――線⑤「『ぼく、ほんとは、わかってた。……だけど、言えませんでした』」とありますが、勇翔はどのようなことを言えなかったのですか。本文の言葉を使って二十五字以内で答えなさい。**（句読点も数える）**

問六　――線⑥「鶏の唐揚げを包んだ銀紙が冬の太陽を反射させ、きらきらと光った。少し離れた場所でボールを蹴りはじめた親子の笑い声が、風に運ばれてきた。」の表現は本文でどのような効果をもたらしていると考えられますか。最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア　勇翔が乗り越えなければならない悲しみの深さを、太陽の激しく熱い日差しと重ね合わせている。

イ　勇翔の受けた悲しみを太陽の暖かな光や、温かい家族の様子を描くことで少しでも前向きにしている。

ウ　勇翔の悲しみを家族の温かさで包み込むと同時に、物語全体を温かい雰囲気に包み込んでいる。

エ　勇翔の受けた悲しみとは対照的な風景を描くことで、逆に勇翔の悲しみをいっそう引き立てている。

問七　――線⑦「ここへ来たのは、父さんは無駄だとは思っていない。」とありますが、拓也が勇翔をここに連れてきた目的はどのようなことですか。「～を感じさせたかった。」につながる形で、本文の言葉を使って四十五字以内で答えなさい。**（句読点も数える）**

問八　――線⑧「鼻の奥に痛みを感じながら、遠くに目をやった。」とありますが、この時の拓也の気持ちとして最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア　勇翔の夢をかなえるためにも、自分も今までの教え方を改めて、厳しく指導しなければならないと思った。

イ　勇翔のサッカーに対する純粋（じゅんすい）な気持ちに心打たれ感動しながら、これからもずっと見守り続けようと思った。

ウ　勇翔が今後本気でサッカーに打ちこむことを確認した上で、もっと実践的（じっせんてき）な練習をさせようと思った。

エ　勇翔がやる気を失っていたことがわかり、早く他の子に追いつかせなければいけないと思った。

問九　本文から、拓也や家族の気持ちが希望に向かって前進していく様子を表現している部分を二か所ぬき出し、それぞれ初めの五字で答えなさい。

四　次の各問いに答えなさい。

問一　次の①～③の慣用句の意味として正しいものをあとから選び、記号で答えなさい。

①　手におえない

②　頭をかかえる

③　油を売る

ア　非常に困る。

イ　むだ話をして仕事などをなまける。

ウ　何もしないでただ見ている。

エ　自分の力ではどうすることもできない。

オ　なかなか行動に移せない。

問二　次の――線部の敬語を、普通（ふつう）の言い方に直しなさい。

①　社長がおっしゃいました。

②　会長のお宅にうかがいます。

国語解答用紙　第一回

受験番号

氏名

評価

一

①

②

③

④

⑤

⑥

⑦

⑧

⑨

⑩

二

問一

問二

問三

問四

a

10

14

b

5

問五

問六

問七

問八

30

10

生き方。

30

10

問九

30

10

35

20

問十

三

問一

10

15

問二

問三

問四

ということ。

問五

10

25

10

20

問六

問七

30

10

40

20

を感じさせたかった。

45

問八

問九

四

問一

①

②

③

問二

①

②